Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-17

雲南省永寧郷ナシ族（モソ人）の伝統的集落・住居の空間構造とその変容 ： 居住地整備事業・観光開発事業後の2つの集落の変化

馮, 旭
山崎, 寿一

(Citation)
日本建築学会計画系論文集,79(696):373-382

(Issue Date)
2014-02

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003062

【カテゴリーⅠ】

日本建築学会計画系論文集 第79巻 第696号, 373-382, 2014年２月
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 79 No. 696, 373-382, Feb., 2014

雲南省永寧郷ナシ族（モソ人）の伝統的集落・住居の空間構造とその変容
－居住地整備事業・観光開発事業後の２つの集落の変化－

RESEARCH ON TRADITIONAL SPATIAL STRUCTURE AND SPACE CHANGE ABOUT NAXI VILLAGE AND RESIDENCE IN YONGNING TOWN, YUNNAN PROVINCE
－ Spatial change from two villages after residence improvement project and tourist development －

馮　　旭*，山 崎 寿 一**
Xu FENG and Juichi YAMAZAKI

This paper is a part of the series study on formulation method of conservation planning in traditional town (village) of P.R.China. In this research, we are trying to find the relationship between spatial structure and conservation planning, which can be utilized as basis for formulating the conservation planning in traditional town (village).

In this paper, the traditional village which is not protected by protecting system because of small-scale is focused on. Taking the traditional Naxi village named Zhebo Centre village and Li Ge Village, which were carried out Improvement project for living condition and tourist development as object, space change of village and residence, and awareness of residents are researched to inspect the influence caused by these two projects. Then evaluation is carried out on two projects (planning) from the aspect on sustainability of spatial structure.

Keywords: *Traditional Spatial structure, Space Change, Improvement Project, Tourist Development, Naxi*
伝統的空間構成，空間変容，整備事業，観光開発，ナシ族

１．はじめに
１．１　研究の背景・目的・方法
（１）研究の目的

本稿は、中国西南地方（重慶市、四川省、貴州省、雲南省）における歴史文化村鎮[注1)]の保護計画に関する一連の研究の１つである[注2)]。本稿は、中国西南地方の少数民族の集落空間構造の研究と保護制度の対象から外れた歴史文化村鎮の保護に関する研究の２つの側面をもっており、以下の研究課題を設定して考察を進めた。

①雲南省永寧郷（麗江市寧蒗イ族自治県に位置する 15 の郷の一つ）に居住するナシ族モソ人[注3)]の集落・住居の伝統的空間構造の特徴を明らかにすること。

②近年の居住環境整備事業・観光開発事業に伴う集落・住居空間の変容、住民の伝統文化・社会制度に対する意識の変化を明らかにすること。

③上記の２つ事業を伝統的空間構造との関連、住民意識の点から評価すること。

（２）研究対象の選定と調査概要

中国の西南地方の歴史文化村鎮保護においては、独自の文化と居住様式をもつ少数民族集落の存在が重要な位置を占めている。そこで、本稿では、特に少数民族が多く居住する雲南省の中から、独特な母系社会を維持してきた雲南省麗江市寧蒗イ族自治県の奥地高原地帯に居住するナシ族の一グループであるモソ人の伝統的な集落を取り上げることにした。

今回の研究では、雲南省寧蒗県政府（永寧郷の上級政府）の協力を得て、2010 年９月下旬に寧蒗県政協の和建華主席、寧蒗県宣伝部の熊天兵部長、永寧郷武装部の熊世軍部長（モソ人、地元に居住、30 歳代）とともに予備調査を進めた。調査の第一段階では、集落別のモソ人の比率、農業従事人口の比率、収入、観光開発の時期について行政の基礎資料を入手、分析した。第二段階では、熊世軍部長の管轄地区である永寧郷の主要なモソ人の集落の予備調査とヒアリング調査を行った。その過程で、近年郷政府の指導の下で、①居住環境の向上･生活の近代化への対応を目指した居住環境整備事業（以下、整備事業と略す）、②自然環境・民族文化の保護及び観光業の発展を目指した開発事業（以下、観光開発と呼ぶ）が進められ、伝統的集落の保護が急務の課題となっていることが分かった。

上記の予備調査結果を基に、本稿では近年居住環境整備事業を導入した者波中村と、観光開発事業を導入した里格村を研究対象に選定して本調査を進める。調査方法について、者波中村と里格村において、全戸（者波中村 27 戸、里格村 30 戸）を調査対象に、家族構成、伝統的集落・住居空間に対する認識、主要な生業と生活方式を

* 神戸大学大学院　博士後期課程・修士（工学）　Graduate School of Engineering, Kobe Univ., M. Eng.
** 神戸大学大学院工学研究科　教授・博士（工学）　Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Kobe Univ., Dr. Eng.

めぐるヒアリング調査、事業の実施で住民意識の変化についてのインタビュー調査（インタビュー調査はそれぞれ 20 戸）のほか、集落・住居の平面の記録も実施した。その際、集落の平面調査について、郷政府からの集落平面図をベースに、近年の変容した部分を記録し、モデル図を作成した。住居の平面調査について、敷地構成と主屋の構成を実測し、空間の変容を記録し、モデル図を作成した。住民が不在の場合、近隣住民にヒアリングを行った。

１．２　既往研究の動向と本研究の特色

本稿の研究対象とする少数民族は、一般的にナシ（納西）族と呼ばれる民族の一グループである「モソ（摩梭）人」である。モソ人は、東部ナシ人として西部人と大別されることがあり、雲南省永寧瓜別・博瓦・項脚等に居住している[注4)]。モソ人は、現在でも母系社会の伝統が維持されており、世界中の学者の関心を集めている。またその民家形態は、累木式（校倉造）民家として独特の形態と構法をもっている。

既往研究では、主に民族学分野では生活習慣や社会環境面、人類学分野では母系氏族の生活様式面に着目して、ナシ族の起源、伝統的文化・芸術の発展、母系氏族の生活習慣の精緻な研究成果が発表されている[注5)]。

建築学分野では 1980 年代以降、ナシ族の独特な居住空間、及び母系氏族の日常生活との関連性が取り上げられ、『雲南民居』（1986 版、2009 版）[注6)] 等の著作が発刊された。日本では、浅川滋男らによって 1990 年代に貴州省･雲南省の住居について現地調査が行われ、その成果は『住まいの民族建築学』（1994）[注7)]・『雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究』（1996）[注8)] として発表されている。また井上えり子はナシ族の伝統的住居に関して他の少数民族との比較から精緻にその特徴を明らかにしている[注9)]。

これまで、モソ人の社会文化・生活様式や伝統的民家に関する研究の蓄積は多いが、集落を対象とする研究は十分とはいえない。

中国では国土全域における経済成長、都市化が急速に展開しており、中国西南地方の少数民族集落でも同様である。それに加え美しい伝統的な集落景観、自然景観を残す少数民族の集落は観光化、近代化に対する対応も迫られている。このような状況にあってモソ人の歴史文化村鎮の保護研究はようやくスタートした段階といえる。

２．研究対象地域の概要

モソ人が居住する雲南省永寧郷は（図１）、湖区（写真１）と壩区（写真２）に分かれ、そのなかがさらに６つの行政村、72 の自然村に分かれている[注10)]。永寧郷には美しい高原や瀘沽湖の自然景観が残されているため、1986 年に第二回の国家級自然風景名勝区[注11)]に指定された。また、モソ人の居住地として、独特な社会文化、美しい伝統的集落・住居が残っており、中国でも有名な少数民族居住区の１つと認識されている。

湖区では、1980 年代末から観光化が進むに従って、住民が自発的・無計画な開発を進めてきた。そのため、伝統的景観が失われ、瀘沽湖の水質も汚染されるという問題が生じている。それに対し、2003 年より瀘沽湖管理委員会と永寧郷政府が里格村を対象として、本格的に瀘沽湖の生態環境の保護と観光開発事業を導入している。

現在、里格村には 30 世帯が住んでいる。かつては農業と漁業を主な生業としていたが、最近は観光業が中心にかわっている。観光開発で他民族の経営者の参入もみられるようになっており、モソ人以外の民族と通婚する住民も現れている。その結果、妻問婚（走婚とも呼ばれる）[注12)] と一夫一婦制の両方が存在し、社会文化への影響も表れている。更に、観光開発によって集落・住居空間に著しい変容がある。

一方、壩区は、観光化が進んでおらず、伝統的な農業、牧畜業、林業と生活様式が維持されてきた。しかし、2000 年代初期から、永寧郷政府の指導の下で者波中村をモデルに、住民の生活を改善することを目指した集落・住居の整備が行われ、集落・住居空間が変化している。

者波中村は、かつて永寧地区を司った領主（土司）が居住していた中心集落であり、今も壩区の中では経済的に恵まれた集落（平均収入が約 2300 人民元/年、農業人口は 26%）となっている。集落は、27 世帯から構成され、住民は全て妻問婚である。

３．整備事業による者波中村の住居・集落空間の変容

３－１．モソ人の伝統的な住居・集落空間の特徴

今回の現地調査では、全 27 戸の住宅プランを採取し、居住者から部屋の呼称、使い方についてヒアリングした。また整備事業導入前後の住宅や住まい方の変容についても調査した。

以下では整備前の者波中村の伝統的な住居・集落空間の特徴を整理する。

（１）伝統的な住居空間の特徴

住居空間について、家族人数が安定しており、改修・改築も少

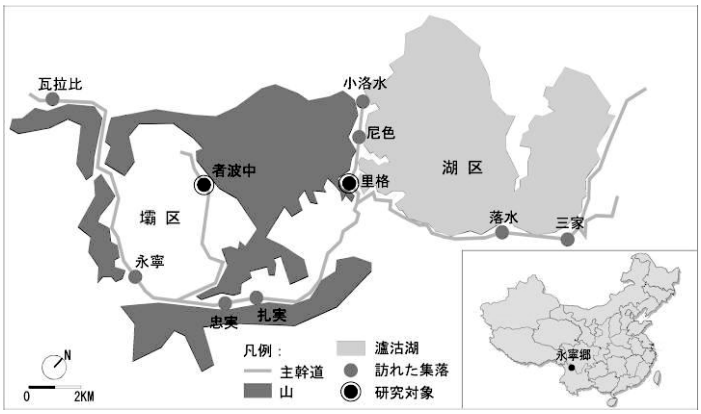


図１　調査地域、集落位置

写真１　湖区・里格村の位置

写真２　壩区・者波中村の位置

ない伝統的な住宅の典型例として 1920 年代に建てられた巴塔の住宅（図２－②）を例にその特徴を整理した。

図面採取と居住者ヒアリングから、モソ人の住居空間の最も重要な特徴は、神・人・畜が共存していることであり、住居内に信仰・生活・生産の場所が整っていることがわかった（図２－①）。この特徴が伝統的なナシ族の住居空間が維持されているか否かを判断する主要な基準となる。

累木式構法を特徴とするナシ族住居の配置は、主屋（写真３－①）、経堂（写真３－②）、居室棟、畜舎が庭を囲むことになっている。経堂はチベット仏教の神の空間[注13]として、信仰に関する活動や家族からでた僧侶が修行を行う場所である。主屋、庭、居室棟は人の空間であり、日常生活の主要な場所となっている。畜舎は畜の空間であり、住居に隣接する菜園とともに生産の場所となっている。

モソ人の住居にとっては最も重要な空間と考えられるものは、家長であり家族を管掌する祖母が住む主屋のなかの主室である。ここでは、家族の日常生活（食事、団らん、接客）が営まれ、成人式や葬式等の重要な儀式を行う場所でもある。主屋の室内の構成は、祖母と未成年の子供の寝室と家族の活動場所となる主室、及び主室を囲む上室、下室（男性の寝室、貯蔵、炊事など）、後室（貯蔵、臨時の遺体安置など）、前廊（主室と外部の緩衝区域）の４つの付属部分を持っている。主室には儀礼（成人式等）のときにも使われる男柱、女柱や囲炉裏、祖先崇拝や火の神の祭壇があり、象徴的な存在となっている。十分な資料はないが、主屋の部屋の配置には、前・後・上・下の接頭語がつく部屋があることから空間の方位観、秩序だての原則の存在が伺われる。

居住棟は、成人した女性には個室（花楼と漢語では表記する）が与えられ、走婚の相手を迎え入れる。男性にも個室が与えられる場合もあるが確実ではない。

以上を総括したモソ人の伝統的な住居空間のモデル図を図２－③に示した。

（２）伝統的な集落空間の特徴

ここでは、モソ人の集落立地の特徴、空間構成、住居空間と集落の関係に着目して考察する。

集落の立地について、今回調査した 10 箇所のナシ族集落は、全て山裾に位置している。壩区出身の熊世軍部長によると、このような立地の特徴は、モソ人が山を神と見なすこと、山裾で防衛機能が備わっていること、山地による生活生産材料の獲得にも平野での生産用地の確保にも意義があることが主な原因ということだった。

信仰空間や共同空間に着目すると、集落の空間構造が理解できる。この集落の自然崇拝のシンボルとなっているのがモソ語で格姆（ガム）女神山とよばれる集落背後の山である。格姆女神は、集落創生にかかわる伝説の女神であり、その名称から場所の意味と価値が理解できる。因みにこの山は漢語では獅子山と呼ばれている。この山は、モソ人の自然崇拝、女神信仰の対象であり、7 月 25 日には「転山節」という山の神を祀る祭りが盛大に行われている[注14]。

また集落の出入り口や住居のまとまりの結節点と主要道路の交点にはラマ堆が立地している（写真４－②）。ラマ堆は、神像や経文や模様を刻む石で積み上げられた塚状の宗教信仰的意味をもつものであり、様々な大きさがある。ラマ堆と周りの空き地から構成される空間は、格姆女神山と並ぶ集落の神聖領域=信仰区域といえる場所である。

以上のように山裾に立地する者波中村は（写真４－①、図３－①）、北は者波上村、南は者波下村と隣接しており、西方には集落の共有地である牧場と農地が広がっている。整備前の者波中村は、主に住居が立地する居住区域、農業・林業・牧畜業を行う生産区域、主要な交差点に分布する４つのラマ堆（写真４－②）と周辺の空地、自然崇拝のシンボルとなっている格姆女神山から構成された信仰区域として捉えることができる（写真４－③）。また集落前方に立地するサークル状の広場、共同遊牧場も共同空間である。

熊世軍部長によると、モソ人の集落空間の特徴は母系社会の家族構成、伝統的住居の空間特徴と関係があると考えられる。母系社会の家族構成は家長である祖母を中心に、全員が同一の母系の血が繋がっている。このような母系家族は１つの住居に暮らしており、規模がいくら大きくても、家族から出る或いは家族を分けて新たな住居を建てることが許されないことである。そのため、家族を分けられる父系家族より、家族も住居も独立性が高いと考えられる。また、増築用地の担保、火災時の延焼を防止するための空地が確保されている。住宅を建設する時に、予め住居の間隔を離すことで、個々の住居の独立性が更に強化されることになっている。

① 主屋（祖母の寝室・家族の集まり）② 経堂（参拝・若者の修行）

写真３　伝統的ナシ族住居の空間（巴塔の家）

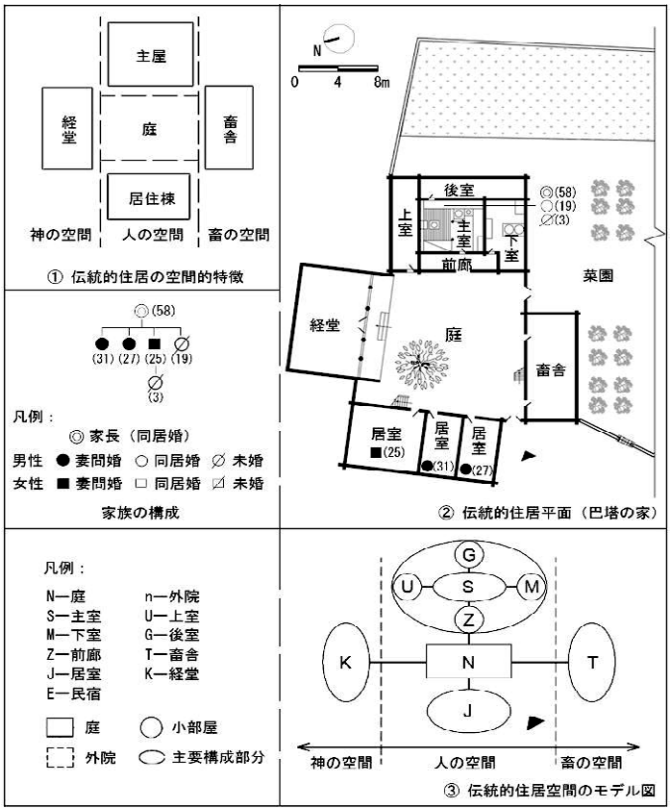


図２　伝統的ナシ族住居空間の分析（巴塔の家を例に）

以上のように、ナシ族の伝統的な集落は山裾に立地し、主に居住区域、信仰区域、生産区域の３つの区域から構成されていること、家族をユニットとした住居空間の独立性が強いという空間的な特徴が指摘できる（図３－②）。

３－２．整備事業に伴う者波中村の集落・住居空間の変容

（１）整備事業の内容

2000 年代初期、永寧郷政府の指導の下で、居住環境を向上させ、住民の生活を充実させることを目指した居住環境整備事業が始められた。尚、上記の事業・計画は、郷政府主導で行われ、事業費は公共部分については省の経費、住宅や個人経営の売店や住宅の改修、新築等は個人負担となっている。政府への土地の売却や事業導入に伴う補助金は存在しているが、その詳細は一般には公開されていない。

（２）集落空間の変容

図３－③には、事業後の集落空間の変化を示した。

集落の整備は、２つの住居群の中間、集落中央にある空き地が対象となり、新たに公共区域が整備されることになった。この公共区域では、伝統的な集落空間の三つの区域の構成を維持したうえで、生活面での近代化や、集落としての共同活動にも対応するよう施設整備が進められた。ここには２軒のレンガ造の売店（写真５－①）、４棟の集会所―公共活動室（写真５－②）が新築・改築され、バスケットボール場（写真５－③）と踊り場が整備された。

（３）住居空間の変容

整備事業によって、敷地内の建物配置と主屋の室内空間が変容した。ここでは、郭次の住宅（1940 年代建設、2007 年改築）を例に説明する（図４－①参照）。

①敷地の空間構成の変容

衛生的な生活環境となるように「人畜分離」が進められた。分離方法は主に畜舎の前にレンガ造の塀を建て庭を内院と外院に分ける方法で、一般的な家庭を対象に 27 軒中 13 軒が整備された（図４－③Ⅰ、図４－③Ⅲ、写真６－①）。次に多いのが元の畜舎を居住棟に改築し、新たな畜舎と外院を外部に増築する方法である。このタイプは、富裕な家庭の場合が多く、27 軒中６軒を占めている（図４－③Ⅱ、写真６－②）。

①山裾に立地する（A で撮影）　②集落の道とラマ堆（信仰区域、B で撮影）③集落の主要な道と民家（C で撮影）

写真４　整備前の者波中村の集落空間の特徴

①レンガで新築された売店（D で撮影）②改築された公共活動室（E で撮影）　③整備されたバスケ場（F で撮影）

写真５　整備事業による者波中村の空間変容

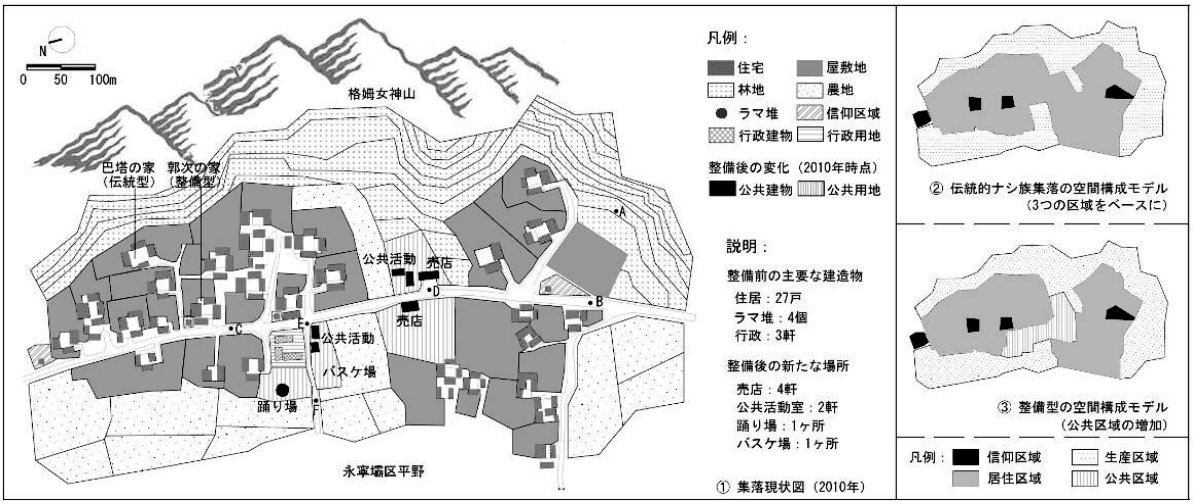


図３　者波中村の集落空間の変容分析

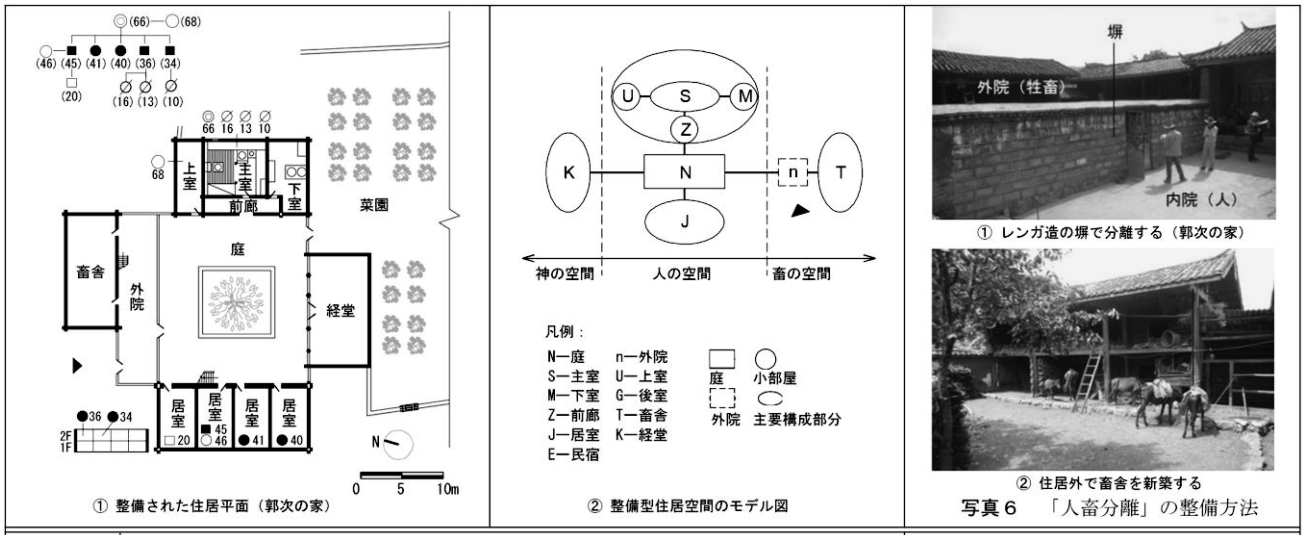
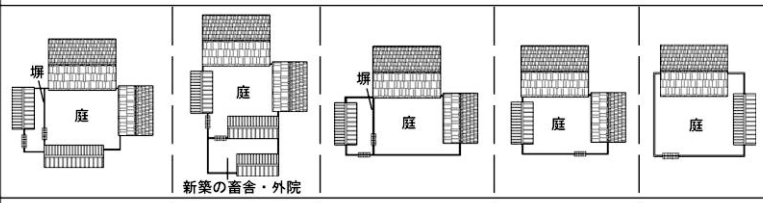
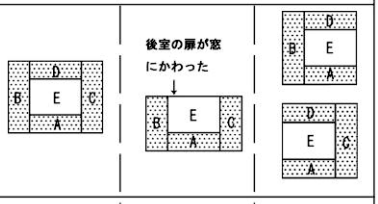


写真６　「人畜分離」の整備方法

	敷地の構成					主屋の構成		
住居空間構成								
平面類型	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	a	b	c
戸数	12	6	3	3	2	9	15	3
構成	主屋、経堂、居室棟、畜舎	主屋、経堂居室棟×2、畜舎	主屋、経堂、居室棟	主屋、経堂、居室棟	主屋、経堂	EをA・B・C・Dが取り囲む	Dがない型	B或いはCがない型
典型的住居空間	伝統型敷地の上に、庭が塀で内院（人）と外院（家畜）と分けられた敷地構成、及び採光のために後室をとる主屋構成になっている （注： A―前廊 B―上室 C―下室 D―後室 E―主室； 敷地の構成の統計は、整備されていない巴塔の家を含んでいない）							

③ 整備後の者波中村の伝統的住居の敷地構成・主屋構成の分析

図４　整備された後の者波中村住居の空間分析

②主屋の室内空間の変容

図４－②に整備事業後の住居空間のモデルを示した。

室内空間の変化は、主屋の採光向上のための改修が多い。利用度が低かった主屋の後室を取り払い、後室の扉を窓に改修した事例が多い（15/27 例、図４－③ｂ）。

この改修では、後室は行事（主に葬儀）にとって意義があることに配慮し、行政の強制的な整備は行われなかった。村幹部の家をモデル的に改修し、その利点を住民に見せることによって、住民が自発的に改修を促すという方法がとられた。

４．観光開発による里格村の集落・住居の変容

４－１．開発前の里格村と保護開発計画の策定

（１）開発前の集落空間構成

開発直前の里格村（2003 年）を写真７、図５－①に示した。里格村は、者波中村の山を隔てた南側に位置している。

集落の南に位置する湖は、モソ語で「シナミ（母なる海）」と呼ばれている（漢語では「瀘沽湖」）。北に位置する山は、「格姆（ガム）女神山」であり、者波中村の信仰となる山とは同じである。湖も山も、モソ語の言葉には信仰や伝説に関わる意味がある。

集落の空間構成は、居住区域、信仰区域（三つのラマ堆がある）、生産区域（農地を主とする）の三つの区域と行政用建物（4 軒）のほか、民宿、飲食店といった観光施設が立地するエリアから構成されていた。

住民へのヒアリングによると、開発前の里格村の主な収入源は農業であり、観光業は副収入であった。郷政府の事業が導入される前には、観光関連施設の殆どは住民が自発的に建てたものであった。

図５－②は、2003 年当時、開発前の里格村の空間構成を模式化したモデル図である。既存の三つの区域を基本に、山裾には伝統的な住居が維持され、湖岸部分では住居が拡張されるかたちで周辺に増築された観光関連の建物が立地していた。

（２）清華大学の集落保護開発計画案

2004 年に永寧郷政府と瀘沽湖管理委員会が清華大学建築系、天地都市建築設計有限公司に依頼し、自然環境保護、観光開発を主にナシ族文化の保護にも着目した集落開発計画案と住居設計案を策定した。この計画案は保護と開発という課題に対する回答案という性格をもつもので、郷政府によって実現した[注15)]。

この集落保護開発計画案の内容は以下の通りである。

①環境保護の面において、汚水の排出で瀘沽湖が汚染されたことと、雨期に瀘沽湖の増水で集落が水害を被っていたことに対して、集落（湖岸部の住居）を山側（北西側）に移転させ、沿岸部を湿地に整備し、先進的に下水処理システムを取り入れることによって、湖水の汚染及び集落の水害を解決する案となっている。

②湖岸部分の住居移転は、湖岸の自然保護の面が重視された結果と見なせるが、伝統的な集落・住居空間や伝統的景観を崩す結果に

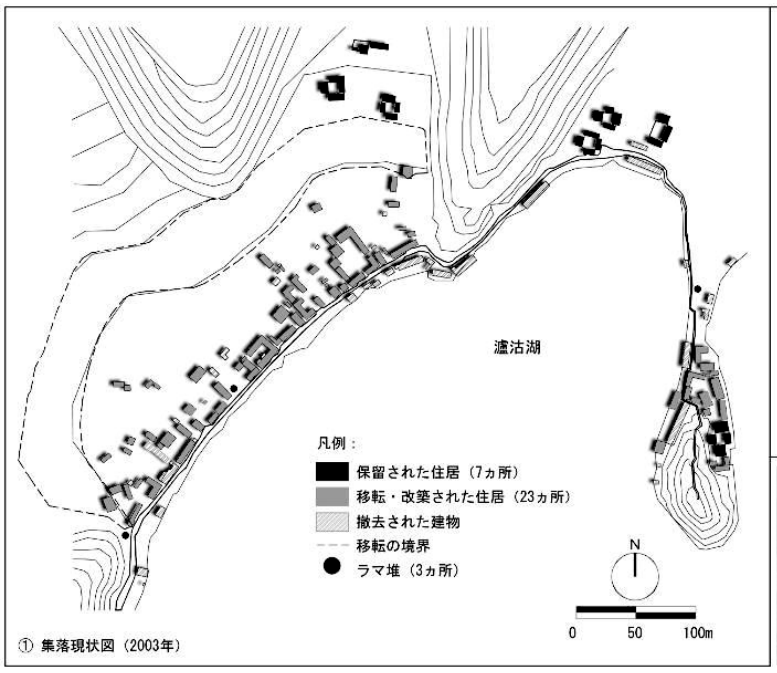


図５　開発前の里格村の集落空間（2003 年）

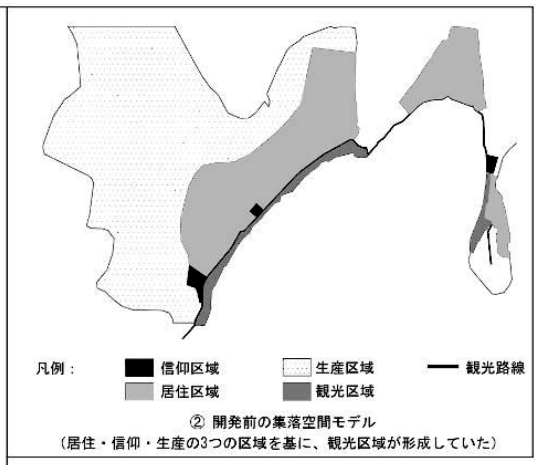


写真７　開発前の里格村（2003 年）

なった。移築された住居は、伝統的なナシ族の住居の特徴を継承する配慮がなされているが､観光に重きを置いたものに変化している。

③観光開発の面において、観光施設を集中的に設置し、湿地と集落の境界に沿って遊歩道を整備した計画となっている。また､行政・事務用建物は観光管理の機能を加え、設置されている。

④インフラ建設の面において、インフラ整備が遅れており、観光発展に対応できるよう給排水、電力、通信などのインフラ施設が整えられ、更に、外部と結ぶ道路交通を改善し、内部の道路も整備されている。

４－２．観光開発の実施と集落空間の変容

（１）観光開発の経緯

実際の開発工事は、2004 年から 2009 年に実施され、以下の順序で進んだ。

①住居の移転と新築

湖から離れ山裾に立地していた７世帯の伝統的な住居は維持されたが､湖岸に面して立地していた他の 23 世帯は撤去･移転された。新たな住居は、沿岸部から山裾の方へ 80m ほどの場所の造成地に移転させられ、新たに整備された遊歩道に沿って４つのグループに分けて住居群が建設された。遊歩道は集落の新たな主軸となる主要道路で、道に面してミセが立ち並ぶように整備された。住宅は居住専用から、居住棟が家族の居室からミセや観光客用の居室へと整備された併用住宅へと変容した。新たな居住と観光ービスの機能を合わせもった住居設計案は、清華大学によって提案されたもので、23 世帯の住居が新築された。

②湖水の保護

汚水処理及び雨季の排水を解決するため、清華大学によって設計・製造された国内の最先端の下水処理システムが取り入れられ、二か所の水処理施設も整備された。

③観光施設、管理施設の建設

住居を移転した後の湖岸区域は湿地帯として整備され、ナシ文化展示館、計画資料館、民宿などの観光施設も集中的に整備された。また、行政・事務管理用施設が観光管理機能も併せ持つ施設として建設され、駐車場と共に行政区域を形成することになった。

④インフラ建設。

主に電力、ゴミ処理、通信施設、及び観光を支えるインフラが建設・改善された。

完成後（2010 年）の集落空間を模式図にまとめたのが、図６－①で、その景観を写真８に示した。

者波中村と異なり、里格村の新しい住宅は家族の居住専用ではなく、観光客の宿泊に配慮されている。また観光施設が集落中央に集中的に設置され、中心機能をもつ観光区域が整備された。さらに行政・管理用の事務用建物が、観光管理にとっても重要な働きを担うことから、その一帯が管理区域として整備されることになった。

開発後の里格村の集落空間は、居住区域、信仰区域、生産区域に、観光区域（行政管理区域を含む）が加わった構成になった。図６－②には開発後の集落空間構成モデルを示した。

（２）住居の整備と空間変容

開発前には、店舗や民宿などの営業機能を加える改築がなされた住居がよく見られていた。それに対し、清華大学の設計者によって伝統的住居様式を維持しながら、営業と居住の機能が含まれた住居案が出された。移転された 23 世帯の住居は、この住居案を参考にして新築された。ここでは、阿尼の家（1940 年代建設、2007 年移転・新築）を事例に考察を行う（図７―①）。

敷地構成の変容について、経堂と畜舎が消滅し、神・人・畜の空間区分の代わりに、営業と家族生活の二つの部分に区分されることになった。

遊歩道に面した元の経堂、畜舎の位置に喫茶店、民宿、娯楽室が新築された。使用機能の変化に伴い、外壁に窓を設け、階高も上げた。さらに、拡大された部屋を支えるため、従前の累木式構法のほか、柱梁構造も合わせて使用されることになった。

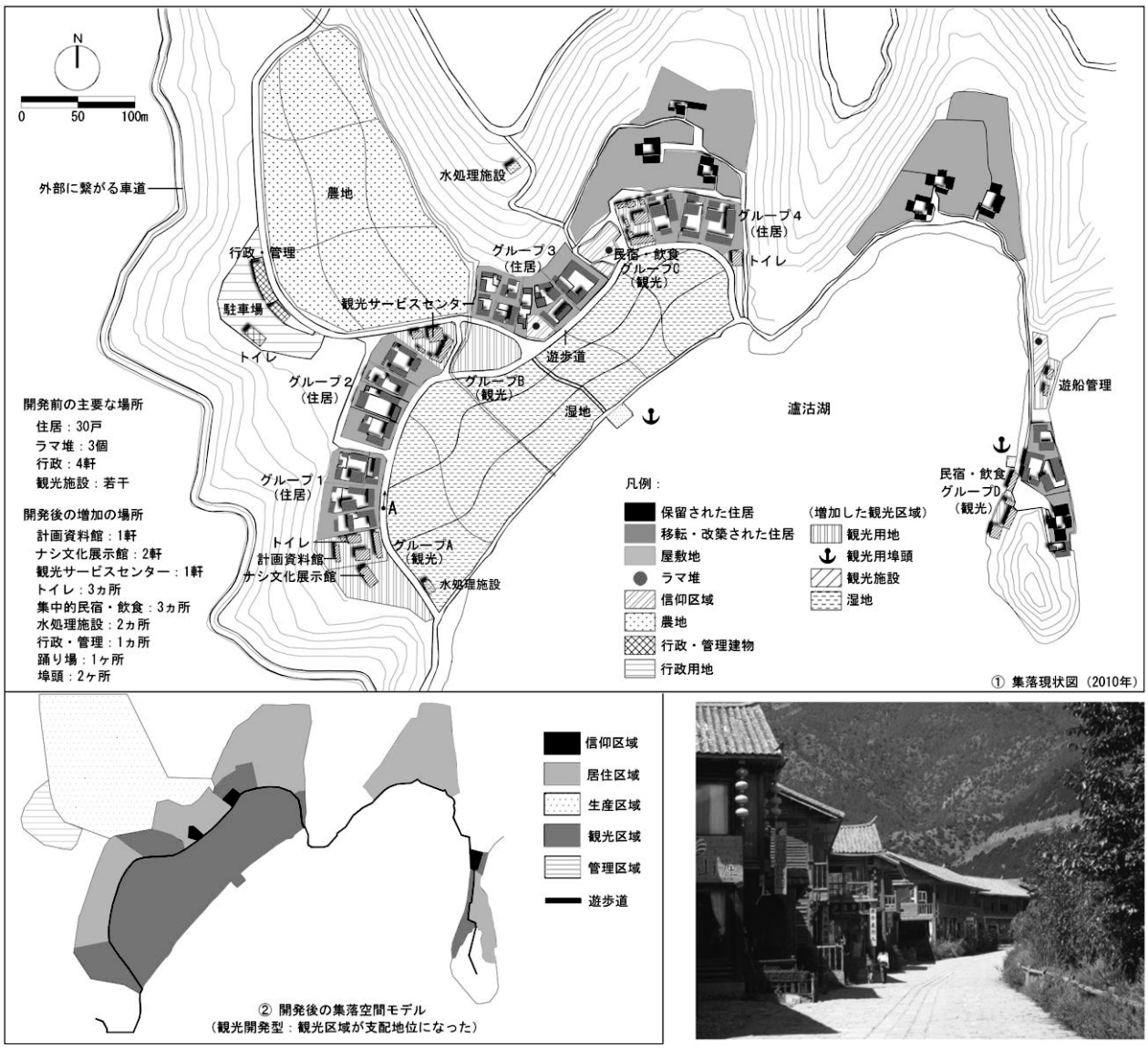


図６　開発後の里格村の集落空間（2010 年）

写真８　里格村の居住地と遊歩道（図６－①の A にて撮影）

家族生活の部分は、主に主屋と居室棟の二つがある。撤去された畜舎は小さな附属棟として再建され、「人畜分離」の方法で主屋の傍に設置されている。また、衛生面での更なる改善を行い、観光客に好印象を与えるため、トイレと浴室も分離され、主屋の傍に独立して設置されている。更に、伝統的ナシ族の住居に重要な地位をもつ経堂が、居室棟に合併され、ただ一室に縮小されることになった。

主屋について、上室、下室、後室、前廊によって主室を囲むという伝統的な主屋の構成を持つ事例は 10 例（図７―③a、保存された 7 世帯が全てこのタイプ）あるが、後室の利用度を上げ、採光向上を図るための住居設計案の通りに、後室を主室の一部分にした事例が一番多い（13/30、図７―③d）。そのほか、後室を取り払う場合が５例あり（図７―③b）、上室或いは下室がない場合が２例ある（図７―③c）。

以上の分析結果を集約し、図７－②に里格村の住居空間モデルをまとめた。神・人・畜という伝統的空間区分において、神・畜の空間が縮小され、人の空間、営業空間が拡大された。敷地構成は対外向けの営業と家族生活の二つの部分に区分され、経堂は居室棟に合併され、畜舎が小さくなって主屋の傍に設置された。さらに主屋の構成は、後室が主室の一部分になる傾向がみられた。

５．住民意識の変化と文化への誇り

整備事業・観光開発を評価するために、住民の意識の変化を把握することにした。ここでは者波中村と里格村において、それぞれ 20 戸（者波中村 27 戸中 20 戸、里格村 30 戸中 20 戸）を調査対象に選択し、問１「事業を実施した後、居住環境と生活様式に変化があるか。伝統文化は維持されているか」、問２「母系社会、妻問婚を代表とした社会制度（生活や文化面）の変化があるか」という設問を設けインタビュー調査（実施日：2010 年 9 月 21 日、24 日）を実施した。表１はその結果を示している。

問１（環境・生活面での変化―伝統的文化の維持）に対する意識について、者波中村の住民は、全て「一般（普通）」、「小さい」を選択した。その理由は、「『人畜分離』や公共施設の設置で集落の空間や場所の変化は認識しているが、伝統的居住環境、生活様式行事などはあまり影響していない気がする」と答えるものが多かった。一

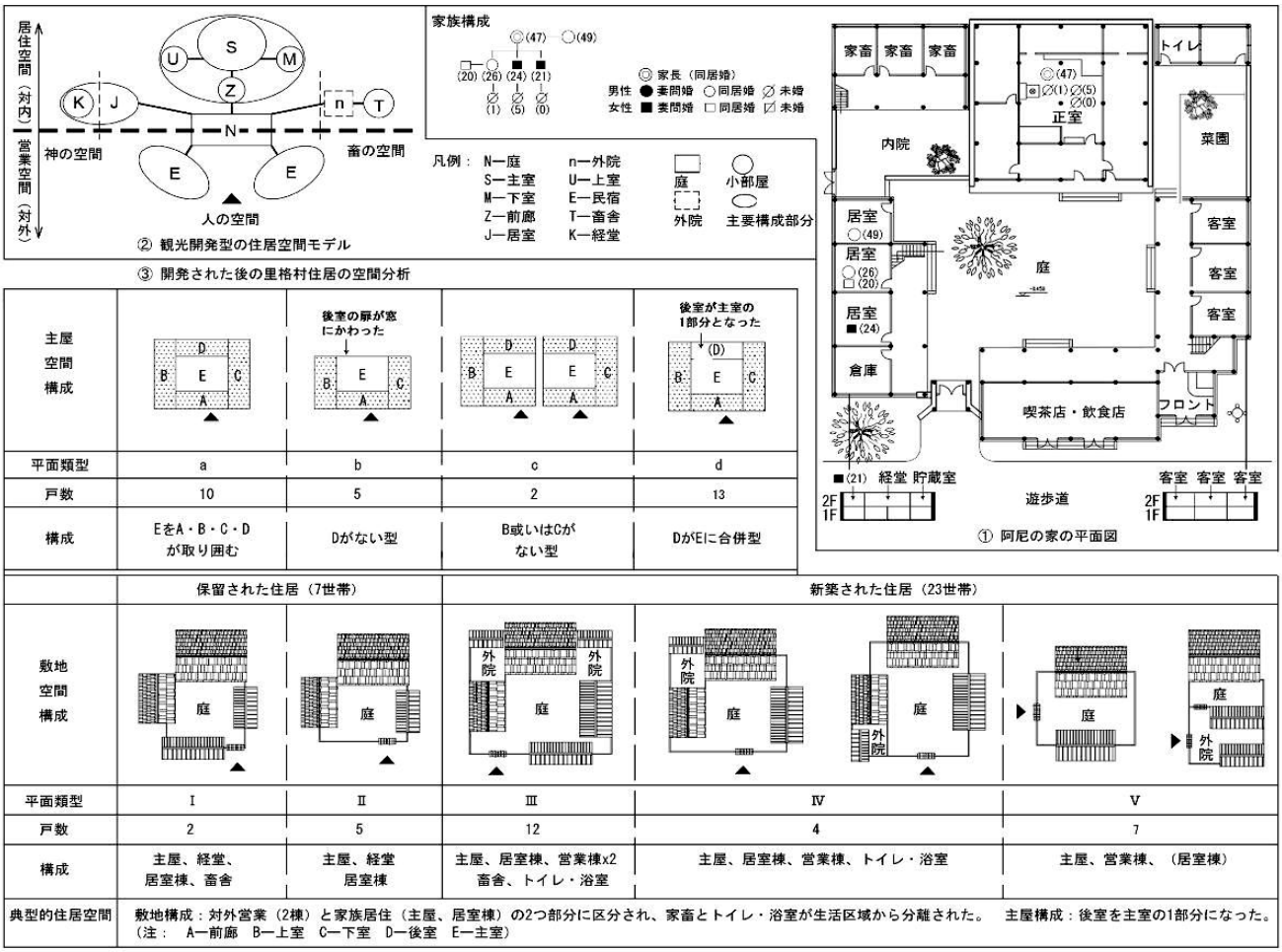


図７　開発後の里格村における住居空間の分析

表１　事業導入後の伝統文化・社会制度に対する意識の変化

伝統文化	者波中村	里格村	社会制度	者波中村	里格村
非常大	0	35%	変化なし	75%	20%
大きい	0	30%	少し変化	15%	70%
一般	85%	35%	変化ある	0	5%
小さい	15%	0	不明	10%	5%

方、里格村では、「非常に大きい」と「大きい」が 65%を占めており、「観光開発で集落と住居の空間や環境、日常生活の様式がずいぶん変わった」と答えている。

社会制度に対する意識の変化は、者波中村の住民が殆ど「変化なし」と回答し、整備事業による社会制度への影響は少ない。里格村の住民が予想外に、「変化なし」と「少し変化」を選択した住民が多く、90%を占めた。それに対して、「母系社会の生活様式がナシ族のシンボルであると考えられ、そこに誇りの気持ちを持っている。開発後、主な収入が観光業から得られているので、民族のシンボルが維持されなければ、観光客への魅力がなくなってしまう」という理由を答えた住民が多かった。この結果は、住民が意識の変化を感じているが、民族の誇りや観光収入を守るため、社会制度を維持しようとすることが把握できた。

インタビュー調査の通り、整備事業が実施された後の者波中村は、住民の伝統的文化、社会制度に対する意識はあまり変化していない。一方、観光開発の実施によって、里格村の住民が伝統的文化に対する意識が大きく弱まる一方で、社会制度を意識的に維持しようという傾向が見られる点は興味深い。

６．整備事業・観光開発事業に対する評価

集落・住居の伝統的空間構造との関係、及び住民の事業や伝統文化や社会制度に対する意識の変化から、二つの事業の内容を把握し、評価する。

６－１．者波中村の整備事業の評価

整備事業が行われた者波中村では、売店、公共活動室、運動場といった公共的施設が整備された。これらの施設は集落の中央に立地し、公共区域が形成されることになる。集落域全体の空間構成は、基礎的区域である居住・信仰・生産の三つの区域が維持され、家族をユニットとした住居の独立性、単位性も維持されている。

住居についてみると、居住環境の向上、生活の現代化への対応が図られ、塀で畜の空間が人・神の空間と分離され衛生上の改善がなされている。

住民の意識面に着目すると、整備事業実施後、伝統文化、社会制度に対する変化は少なく、伝統的意識は安定し維持されていると判断できる。

６－２．里格村の観光開発事業の評価

観光開発事業の実施によって、里格村では湖岸の旧住居群の撤去

と自然環境の再生、旧住居群の移転に伴う新居住域の整備、新たな観光と行政管理機能を担う行政区域（公共区域）の整備、新居住域と湖岸湿地帯の間の遊歩道の整備が進められた。ここでは湖岸の自然保護に対する回答として住居群の撤去という強硬手段が取られ、伝統的な民家景観の保全については伝統型の新住宅の建設が行われた。

自然保護、民家の現代化・観光化・景観復元という目標は達成されたようにみえるが、何れも既存環境の保全を前提としない新規の開発である点に特徴がある。また集落レベル、住居レベルのいずれにおいても、観光と居住が一体となった整備、特に観光優先で生活が従属している傾向がある。

住居に着目すると、牧畜業の衰退による畜の空間の弱化傾向が顕著に表れ、さらにナシ族住居にとって大切な神の空間（経堂）が極端に縮小される傾向にある。住居および敷地構成は、神・人・畜の共存空間から、観光客の宿泊や商売などの商業空間と家族生活の併用空間へと変わっている。

今回は、湖岸地区の住宅は、すべて解体され、移築により保存するという手法は取られていない。すべての住宅は伝統型住宅の新築で、その結果、伝統的な民家景観を復元しようとした点に特徴がある。

湖岸部分の移転によって新たに形成された居住区の景観は、新たに建設された住宅が、伝統的な外観を採用したことによって一見継承につながっているようにみえるが、それは伝統のイミテーションであり、またそれを担保する法的根拠がないのが現状である。

住民の意識面に着目すると、観光開発事業後、物的な変化が認識される一方、伝統文化、社会制度の変化に対する変化の認識は低い。むしろ、インタビュー調査の過程で、モソ人の母系社会を中心とする社会制度や文化に対する誇り、維持意欲が強いことが明らかになった。

６－３．保護手法の比較と評価

二つの事業の特徴を比較すると、伝統的空間構造を基礎にして整備を進めた者波中村と、伝統的空間構造を大きく改編した里格村の違いが明確である。

前者の者波中村での事業は、既存の住空間、集落空間の空間構成パターンを継承するもので、住居の独立性、居住区域、生産区域、信仰区域が保全されている。住居については主に衛生面からの改善がなされ、集落では行政や生活の共同化・近代化の側面から公共区域が整備された点に特徴がある。伝統的な空間構造の継承、住民意識の変化からみて、この事業の成果は評価することができる。

後者の里格村の事業は、湖と湖岸の自然保護が優先され、民家の伝統的景観の形成が図られたが、既存の住宅の保存や集落空間の伝統的な空間構成は保存には配慮されなかった。湖および湖岸の自然保護は達成されたが、湖岸に住む人々の湖との関係は大きく変容した。また湖岸の伝統的な民家は保存されず、伝統的な住宅デザインをもつ民家の復元的新築となった。当初伝統的集落の保護、建築の外観や集落景観の保護が重視されたが、結果は、集落・住居空間や室内空間が大きく変化した。住居、集落の空間構成は、ともに観光化への対応を基本に、住居は併用住宅に、集落は観光用の遊歩道を中心に集落空間が再編されることになった。観光化は、住民に対して物的変化を強く認識させる結果となったが、ナシ族の母系社会や伝統文化に対する誇りも同時に強めた。この点は注目に値する。

７．まとめ

本稿は、雲南省永寧郷の者波中村、里格村を対象に、モソ人の伝統的な集落・住居の空間構成とその特徴、及び整備事業・観光開発事業に伴う集落・住居の空間変容と住民意識の変化を明らかにし、二つの事業を空間面・社会面での伝統文化の継承という視点から評価した。

最後に本稿で明らかになった知見、少数民族の歴史文化村鎮の保護について考察を加え、まとめとしたい。

①伝統的モソ人の集落・住居の空間構造

モソ人の住居空間は、主屋、経堂、居室棟、畜舎で庭を囲む敷地構成、主室、上室、下室、後室、前廊で構成された主屋構成に特徴がある。また神の空間（経堂）・人の空間（主屋、庭、居室棟）・畜の空間（畜舎）が共存し、信仰・生活・生産の機能が住居内の基本的な空間構成に対応していることがわかった。

モソ人の集落空間については、自然崇拝・信仰の対象となる山（女神山、獅子山）の裾野に立地し、居住・信仰・生産の３つの区域をベースに集落域が構成されていること、居住域は、母系家族に対応する独立性の高い住居空間と隣接する菜園、空地によって構成され、集落の出入り口や中心の主要道にラマ堆が立地し、秩序化されている。

②事業に伴う集落・住居の空間変容とその評価

者波中村の整備事業では、集落空間に公共区域が形成され、住居空間では人畜分離が進んでいるという変化が明らかになった。ここでは従来からの集落の居住・信仰・生産の３つの基本的区域や住居における家族をユニットとした空間的特徴、住居の神・人・畜の空間共存関係も維持されている。また空間変容が進む中で、住民の伝統文化や社会制度に対する誇り・意識は安定しており、者波中村の集落・住居の伝統的空間構造の維持にもつながっていることが明らかになった。

一方、里格村の観光開発事業では、湖岸に立地していたすべての住居が内陸に移転（新築）され、湖岸の自然環境が再生・保護された。ここでは従来の集落の空間構造が改変され、新たな居住区域に伝統的な形態・外観の住宅が建設され、主要道もプロムナードとして整備された。集落の伝統的空間構造も大きく変容し、住居レベルでも、道に面する家族用の居住棟は客室、ミセの観光用へと変化した。また経堂が一室に縮小された事例もあり、神の空間の弱化がはっきり表れている。観光化の進展と住居・集落空間の観光を軸とした整備、変容が進むなかで、母系社会の維持、モソ人の文化に対する誇りや意識が強まる傾向があることがわかった。

③少数民族の歴史文化村鎮保護の今後

二つの事業の比較から、少数民族の歴史文化村鎮保護において、集落と郷政府、さらに県、省との連携システムの確立が急務である。また実際の保護計画の策定、整備事業の導入、その後の管理・運営において住民および地域の参画とその組織的整備が重要である。その際、空間的にも社会的にもまとまりの単位となっている村（集落）組織の育成・活用が重要である。

その際、生活の現代化、居住環境の向上、観光化への対応といった直面する問題を解決し、同時に独自の文化や社会制度の維持、集

落景観や自然環境の維持を図る計画、制度、運営組織の整備が必要である。

保護計画を進めるうえで、まず住民の伝統文化や生活文化、生活様式の尊重、誇りを確認し、それを育成することが基本である。

集落全体の整備とそれに関連する地域の住民組織や空間構造の維持・発展を目標に、保護計画策定に際して、伝統的な住居・集落空間の構成原理と近年の変容動向を把握・検討する基本調査が必要である。その結果を踏まえて、伝統的な空間構成、景観形成の基本原理を探求・確認し、現代の生活面、観光面での新たな要求への対応が必要となる。

具体的には観光化に対する住居や集落空間の整備と日常生活に対応する住居空間や集落の調和ある整備が大きな課題となる。その際、共同施設の整備、施設・行政施設が立地する中心エリアの整備が課題であり、伝統的な集落空間の基本構成との調和・調整が必要で、住宅および施設、集落景観に関するデザインガイドの設定も課題となる。

謝辞

重慶大学建築城規学院の周鉄軍教授には現地調査の機会を戴きました。謝意を表します。また現地でお世話になった寧蒗県政協の和建華主席、寧蒗県宣伝部の熊天兵部長、永寧郷武装部の熊世軍部長、本稿作成にあたってご協力いただいた神戸大学大学院工学研究科建築学専攻の山口秀文助教にもあわせて謝意を表する次第です。

注

注1）歴史文化村鎮は、歴史文化名鎮名村（以下、名鎮名村と略す）とも呼ばれている。村とは、農業を主な産業とする中国の農村地域の自治体であり、鎮とは、より大きな村をベースに、交通の便の良さで商品の集散地から発展してきた、農村と都市の特徴を持つ農村地域である。村鎮は中国の農村地域の基礎単位となるため、歴史的文化的価値のある村鎮（歴史文化村鎮の定義）の保護は中国の農村地域における歴史的環境保護の基礎となっている。また、中国での「保護」という用語は、「保存」と「保全」の意味を兼ねている。「点」的制度も、「面」的制度も「文化財保護」と呼ばれている。

注2）既報（参考文献1））では、中国の歴史環境を対象とする文化財保護政策及び村鎮保護方法の展開を、既報（参考文献2））では、国家級名鎮に指定された四川省宜賓市李庄鎮を具体的な対象に、保護制度の応用実態・保護計画の策定手法・保護整備の過程を明らかにした。

注3）ナシ族とモソ人の区別は参考文献3)に記述されているが、本稿での対象はモソ人の集落であり、ナシ族（中国の56の民族の一つ）に属する。近年、中国の文献と著作では用語を標準化するようになっているため、「モソ人」は徐々に「ナシ族」という表現に変わっている（例えば、「雲南民居（1986，第一版，参考文献3））」では「モソ族民居」の部分が独立しているが、「雲南民居（2009，第二版，参考文献4））」では「ナシ族民居」の部分に配属されている）。本稿では「モソ人」を用いる。

注4）周尚意・孔祥：文化地理学，高等教育出版社，2010。西南地方が中国における少数民族の数・人口の最も稠密な地区である原因を論述した。

注5）例えば、楊福泉：納西族文化史論，雲南大学出版社，2006。Oppitz·Michael・Elisabeth Hsu： Naxi and Moso Ethnography-Kin, Rites, Pictographs, Cambridge University Press, 1998

注6）「雲南民居（1986，第一版，参考文献3））」は雲南省における様々な民居についての初めての調査研究であり、民居の種類と主要な空間に注目したものである。「雲南民居（2009，第二版，参考文献4））」は、歴史的発展、住居空間の特徴、使用している材料、建造技術などに着目して、主要な雲南民居のタイプを詳しく論述しているものである。

注7）参考文献5）参照。

注8）参考文献6）参照。

注9）参考文献7）参照。

注10）中国政府は郷（鎮）の下に行政村という行政レベルを設置しており、それは隣接するいくつかの自然村（集落）によって構成されている。また自然村は、行政村の委員会（村民委員会）によって管理されている。

注11）中国の国家級自然風景名勝区とは、観光、文化、科学的な価値を持っており、自然景観、人文景観がより集中し、美しい環境があり、観光或いは科学・文化活動を行うことができる区域を指す。

注12）妻問婚とは、婚姻の一種で、夫が妻の下に通う婚姻の形態のこと。走婚、招婿婚ともいう。母系制度の伝統のある社会など母権の強い民族に多く見られる婚姻形態で、普通、子は母親の一族に養育され、財産は娘が相続する。

注13）永寧郷のモソ人は2つの信仰を持っている。ダバ教が原始信仰としてモソ人の永寧郷に定住から存在しているが、11世紀からチベット仏教が輸入され、行政と緊密な関係があったため、永寧郷モソ人の主要な宗教信仰となった。モソ人の住居に、主室では、ゾンバラ（囲炉の前）、スウトォ（主室の入り口の向こう側）というダバ教の神様を奉安し、居住機能と混在している一方、チベット仏教は専用の建物（経堂）があり、モソ人の修行や参拝活動の重要な場所である。本稿の神の空間はチベット仏教の影響での独立した住居空間を指している。

注14）参考文献8）参照。

注15）参考文献9）参照。

参考文献

1）馮旭・山崎寿一：中国における『歴史文化名鎮名村』保護制度の展開とモデル計画事例に関する考察－1980年以降の「面」的保護に着目して，日本建築学会計画系論文集，No.684，pp.373-382，2013.2

2） FENG Xu・HINAMOTO Yota・YAMAZAKI Juichi：Evaluation of the Transition of Conservation Planning and Model in Historical and Cultural Town（Village）in China-The case of Lizhuang in China，第九回アジアの建築交流国際シンポジウム（ISAIA）論文集，2012.10

3）雲南省設計院（編）：雲南民居，中国建築工業出版社，1986

4）楊大禹・朱良文：雲南民居，中国建築工業出版社，2009

5）浅川滋男：住まいの民族建築学，建築資料研究社，1994

6）浅川滋男・井上えり子他：雲南省ナシ族の母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究、丸善、1996

7）井上えり子：ナシ族の住居の空間構成―中国の古羌系民族の住居と集落に関する研究　その３，日本建築学会計画系論文集，No.539，pp.111-118，2001.1

8）金縄初美：中国雲南省モソ人の文化保存活動とアイデンティティー東アジアへの視点，国際東アジア研究センター，2012.9

9）清華大学建築学院，北京天地都市建築設計株式会社，麗江瀘沽湖観光区管理委員会：里格民族観光村環境整備計画，2004

10）遠藤織枝：中国雲南摩梭族の母系社会，勉成出版，2002.4

11）金龍哲：結婚のない国を歩く－中国西南のモソ人の母系社会，大学教育出版，2011

12）金縄初美：中国雲南省・瀘沽湖における観光化と民族意識の相互作用，北九州市立大学『外国語学部紀要』，2012

13）布野修司・胡惠琴（訳）：世界住居，中国建築工業出版社，2011

14）国務院法制办農業資源環保法制司，住房与城鄉建設部法規司，城鄉規劃司：歴史文化名城名鎮名村保護条例，知識産権出版社，2009

15）国家科技支撑計画子課題任務書，研究課題番号：2008BAJ08B02-2，研究代表者：肖大威　周鉄軍，2008～2012年度

16）歴史文化村鎮保護計画技術課題内容紹介書，2008

17）雲南省寧蒗イ族自治県志編纂委員会：寧蒗イ族自治県志，雲南民族出版社，1992

18）呉正光，陳頴，馬薇：西南民居，中国建築工業出版社，2010

（2013年２月10日原稿受理，2013年11月11日採用決定）